

本書は、古典文学の教育方法について、新たな視点と、それに基づいた教材案を、共に提示するものである。古典文学教育に係る七本の論考（『本編』）と『源氏物語』に係る三本の断想（『附載』）から成り、前著『古典文学研究の視角』の姉妹編として位置付く。

それぞれの小考にあつては、取り扱う作品については、極力、一般的であること、また、分析内容等については、極力、幅広く啓蒙的であることを、それぞれ目標に、大学生などの初學者にとつては無論、一般の方々にとつても有用であるよう努めた。大学学部・大学院の導入期やカルチャースクール等のテキスト・サブテキストとして、あるいは、古典文学・古典文学教育に心を寄せる方々の教養書として、広くご利用いただければ幸いである。

なお、各小考執筆時期の著者の所属が、高等学校・高等専門学校・大学と異なっているため、分析内容や教材案など、一部、各所属校の現況に即したそれとなっている。また、当該時期の「学習指導要領」等も、改訂に伴つて異なっているため、科目名や「要領」中の語句など、現行のそれらと相違する箇所もある。いずれも、今日の目を以て改稿すべきとも考えたが、執筆時の思考を重んじたく、一部の語句の修訂のみにとどめることとした。

古典文学教育の探究

目次

CONTENTS

はじめに…………… i

section #1 『うつほ物語』の教材価値…………… 2

section #2 『落窪物語』の教材価値…………… 13

section #3 『浜松中納言物語』の教材価値…………… 34

section #4 『山路の露』の教材価値…………… 55

section #5 教材としての厄災
——『竹取物語』・『うつほ物語』の事例を中心に——…………… 65

section #6 敬意表現を文学的に読む

——『源氏物語』『薄雲』巻についての一考——…………… 91

section Ⅶ	高等学校古典『方丈記』の扱い方	
	—「ゆく河の流れ」の表現と主題—	103

〔附載〕

『源氏物語』	ところどころ	120
section Ⅰ	光源氏の初恋	121
section Ⅱ	私は嫌い	124
section Ⅲ	薫に会いたい	127

古典文学教育の探究

section #1

『うつほ物語』の教材価値

一

周知の通り、『うつほ物語』は、『源氏物語』に先行する現存最古の長篇物語である。秘琴伝授に関わる伝奇物語的性格や、あて宮求婚譚に関わる恋物語的性格、また、藤壺皇子と梨壺腹皇子との立太子争いに関わる政治物語的性格など、様々な要素を兼ね備え、更には、物語発端のセオリーたる「昔、…」との冒頭部を複数巻有し、長篇化の過程が窺えるその組成のありかたにおいても、注目されるべき重要作品である。

しかし、高等学校古文の現行検定教科書において、この物語を採録するものは皆無と言って良い（当時）。指導者としても、せいぜい古典文学史の授業でその作品名に触れる程度、といったところが、偽らざる高校現場の現状なのではなからうか。

確かに、高校古文の授業で扱う「長篇物語」としては、古文の領域のみならず、全ての日本文学の精華『源氏』の地位が揺らぐことは今後ともないだろう。また、「伝奇物語」や

「恋物語」として扱われることの多い『竹取物語』や『伊勢物語』など、内容自体が簡易である上に、多く学習者に予備的知識があり、高校古文の導入段階には極めて有用であって、これも今後とも採録は続くと思われる。それらの観点からは、敢えて『うつほ』を採録しなければならぬ必然性は乏しく、ゆえに教材としても注目されにくい、ということなのだろう。そのような現状は十分に理解される。

しかし、かかる観点とはまた別の、高校生向け教材としての相応しさが、この『うつほ』にはあるのではないか。「秘琴伝授」と関わって、発展途上にある高校生にこそ読ませておくべき重要な内容を有していると考ええる。

二

以下、前節で述べた「重要な内容を有している」本文を引用するが、教材として使用する便宜のため、A・B・C三つの場面に区切り、また、私に現代語訳を付しておく。なお、引用の『うつほ』本文及び頁数は、小学館『新編日本古典文学全集 うつほ物語』に拠る。この『新全集』本の底本は、尊経閣文庫蔵前田家本である。

【場面A】

俊蔭女は、時の太政大臣の子、若小君と一夜の邂逅の結果、仲忠を生む。父俊蔭の死後、零落した俊蔭女と仲忠は、都を離れ、熊から譲られた北山のうつほで木の実を食べながら生活していたが、ある日、俊蔭女は、父から授けられた秘琴の奏法を仲忠に伝授しようとする。

「今は暇あめるを、おのが親（俊蔭）の、かしこきことに思ひて教へたまひし琴、習はしきこえむ。弾きみたまへ」と（俊蔭女は）いひて、①りうかく風をばこの子（仲忠）の琴にし、ほそををばわれ弾きて習はすに、聴くかしこく弾くこと限りなし。人氣もせず、獣、熊、狼ならぬは見え来ぬ山にて、かうめでたきわざをするに、②たまたま聞きつくる獣、ただこのあたりに集まりて、あはれびの心をなして、草木もなびく中に、尾一つ越えて、いかめしき牝猿、子ども多く引き連れて聞く。（俊蔭巻八〇～八一頁）

〈訳〉

「今は暇があるようなので、私の父俊蔭が、重要なことだと思って私に教えなさった琴を、あなたに習得させ申し上げましょう。弾いてみなされ」と俊蔭女は言って、りゅうかく風をこの子仲忠の琴にし、ほそお風を自分が弾いて習わせると、仲忠は利発で立

派に弾くことこの上ない。他に人気もなく、獣も、熊や、狼でないものはやつても来ない山で、このようにすばらしい演奏をしていると、たまたま聞きつけた獣は、ただただこの周辺に集まって、憐憫の心をもよおして、草木もなびくなく、尾根を一つ越えて、大きな牝猿が、子どもを多く引き連れて琴を聴く。

【場面B】

俊蔭女による仲忠への秘琴伝授は、日々続き、仲忠は成長していく。

かくしつこの琴を弾くを聞くほどに、この子七つになりぬ。③かの祖父が弾きし七人の師の手、さながら弾き取りはてつれば、夜昼と弾き合はせて、春はおもしろき草々の花、夏は清く涼しき陰に眺めて、花、紅葉の下に心をすましつ、わが世は限り、命あらむに従はむ、と思ふ。④琴は残る手なく習ひ取りつ。この子変化の者なれば、子の手母にもまさり、母は父の手にもまさりて、ものの次々は劣りこそすれ、この族は伝はるごとにまさること限りなし。かくて、この子十二になりぬ。容貌のうるはしくうつくしげなること、さらにこの世の者に似ず。綾、錦を着て、玉の台にかしづかるる国王の女御、后、天女、天人よりも、⑤かかる草木の根を食物にして、岩木の皮を着物にし、獣を友として、木のうつほを住みかとして生ひ出でたれど、目もあやなる光添ひてなむ

ありける。(俊蔭卷八一〜八二頁)

《訳》

このようにしながらこの琴を弾くのを聴くうちに、この子仲忠は七歳になった。あの祖父俊蔭が弾いた七人の師の奏法を、そのまま全て弾き覚えてしまったので、母子は夜昼と合奏して、春は美しい草々の花を見、夏は清々しく涼しい木陰で物思いをし、桜や紅葉のもとで心を澄ませつつ、母俊蔭女は我が生涯は命の限り、運命に従おう、と思う。仲忠は琴の奏法を残りなく習い取った。この子は変化の者であるから、子の琴の奏法は母にも勝り、母のそれは父にも勝って、一般に習い事は代々劣りこそするが、この一族は伝わる毎に勝っていくこと限らない。こうして、この子は十二歳になった。容貌が美しくかわいらしいことは、全くこの世の者とも思われない。綾や、錦の着物を着て、立派な御殿で大切にされる帝の女御や、后、天女や、天人よりも、このように草木の根を食料にして、木の皮を着物にし、獣を友として、木のうつほを住居として成長したけれど、仲忠は目にもまぶしい光が備わっていた。

【場面C】

ある時、東国の武士の襲来があり、俊蔭女と仲忠も危険にさらされるが、秘琴の不思議な力によって難を逃れる。その後、帝の北野行幸があった。

その日、帝、北野の行幸したまふ日にて、その山のあたりなど御覧するに、⑥その日さぶらひたまふ右大将のおとど（昔の若小君。仲忠の父）、御馬を引きまはして、この琴の調べを聞きつけたまひて、御兄の右のおとどに聞こえたまふ、「この北山に、限りなく響きのほるものの音なむ聞こゆ。琴の声と聞こゆれど、多くのものの音合はせたる声にて、⑦内裏にさぶらふせた風の一つ族なるべし。いざたまへ。近くて聞かむ」とのたまふ。（俊蔭卷八四～八五頁）

〈訳〉

その日は、帝が、北野神社への行幸をなさる日で、その仲忠らのいる山の付近などを御覧になっていると、その日お供なさる右大将殿が、御馬を乗り回して、この琴の音を聞きつけなされて、兄の右大臣殿に申し上げなさるには、「この北山に、この上なく響き渡るものの音が聞こえます。琴の音と思われませんが、多くの楽器の音を合わせたよう

な音で、宮中にございますた風と同じ類の琴であるようです。さあいらっしゃって下さい。近くに行つて聞きましょう」とおっしゃる。

三

【場面A】においては、特に次の叙述に注目したい。まず、傍線部①、「りうかく風をばこの子（仲忠）の琴にし、ほそををばわれ弾きて習はすに、聴くかしこく弾くこと限りなし」とある部分だ。「ほそを」風も「りうかく風」も秘琴の名称である。母俊蔭女が「ほそを」風で手本を見せ、子仲忠が「りうかく風」で習い取るのであるが、その体得ぶりは、「聴くかしこく弾くこと限りなし」と評しうるほど見事なものだったという。また、その音色は、傍線部②、「たまたま聞きつくる獣」や「草木」、「いかめしき牝猿」やその「子ども」までも感応させたという。

並外れた秘琴の力を召喚しうる人物として仲忠があること、そして、その「力」が母から秘琴の奏法を通して仲忠に継承されたことが知られる。いわば、仲忠は、母の奏法を日々学ぶことで、「力」の「体得」者として成長したのである。仲忠の真摯な学習姿勢が、継承

者に相応しい「力」を「体得」させたと言えるだろう。

【場面B】においては、次の叙述に注目したい。まず、傍線部③、「かの祖父が弾きし七人の師の手、さながら弾き取りはてつれば」とあるところだ。「かの祖父」とは、天人から秘琴を伝授された初代、俊蔭その人であり、「七人の師の手」とは、俊蔭が直接習い取った天人の奏法のことであるが、仲忠は、それらを「さながら」、即ち、「師」の奏法そのままにマスターしたという。更に、傍線部④、「琴は残る手なく習ひ取りつ。この子変化の者なれば、子の手母にもまさり」とある通り、「残る手なく」完全に習得した上に、その技量は「母にもまさる」ほどであったという。「変化の者」に映るほど仲忠の習熟ぶりは卓越しており、文字通り、出藍の誉れと言うべき成果であったと言えるだろう。しかも、傍線部⑤、「かかる草木の根を食物にして、岩木の皮を着物にし、獣を友として、木のうつほを住みかとして生ひ出でたれど」に明らかのように、「草木の根を食物に」し、「岩木の皮を着物に」しなければならぬまでに、仲忠の生育環境は苛酷なものであった。

このような苛烈な環境に打ち克ち、この上ない「成果」を挙げる仲忠のありかたは、決して看過してはならないだろう。

さて、その後、東国の武士の蛮行から秘琴の「力」によって救われた仲忠と母俊蔭女に、

大きな転機が訪れる。【場面C】である。注目すべきは、傍線部⑥⑦だ。「右大将のおとど」というのは、かつて俊蔭女と邂逅した「若小君」、即ち、仲忠の実父である。「右大将」は、俊蔭から宮中に伝えられた秘琴「せた風」の音色と、仲忠らが奏でる「この琴の調べ」、即ち、「りうかく風」や「ほそを」風」のそれとの酷似を聞き判じ、より近くで聞くべくその主を訪ねて北山のうつほにやってきて、遂に父子の対面が実現する、という次第である。周知の通り、この父子の対面を契機に、仲忠は、母俊蔭女ともども都に迎えられ、そして、順調に出世を果たしていくのであった。いわば、【場面C】は、零落した母子が、一転、復権の途に就く大きな転換点なのであるが、そこに「この琴の調べ」の「力」が契機として働いていることは疑いない。

無論、「秘琴伝授に関わる伝奇物語」として、秘琴の「力」が仲忠を権力の座に押し上げる、という展開が仕組まれるのは、この物語の組成に照らして、至極当然のことなのではあろう。また、むしろ、「右大将」が、「右のおとど」右大臣を「兄」に持ち、且つ帝の行幸に近く随伴できるほどの権力者であり、その上、宮中の「せた風」と仲忠らの音色の類似性を峻別できる能力をも兼ね備えた識者である、という人物造型のありかたについて、より重視する視角もあろう。

しかし、ここではそれらは一旦措こう。【場面A】（【場面C】の物語展開には、極めて教材として有用な要素が盛り込まれていると思うのだ。それは、即ち、「苛烈な環境」に打ち克ち、「真摯な学習姿勢」の継続によつて師匠を凌駕するほどの「成果」を挙げ、それを元に「復権」の未来を切り拓く、という仲忠の生き方である。教授者を上回るほど一途に自身の才能を磨き、その成果を以てより良い未来を開拓していく仲忠の姿は、過度とも思われる情報社会の中で自らの進路や役割に思い悩み、また、日々の人間関係に汲々としているであろう昨今の高校生の心を強く揺さぶるに相違ない。自身と仲忠とを重ね合わせ、自身の今、そして、未来について腰を据えて思索する、そのような機会を、この『うつほ』の一節は、十分に提供しうるのであり、それゆえ教材としての意義も大いにあると思うのだ。

前々節に、『うつほ』が検定教科書に採録されにくい現状について触れた。『源氏』、『竹取』、『伊勢』といった、いわゆる安定教材は、今後も変わらず高く評価され続けるだろうし、そのこと自体に異議を唱えるつもりは毛頭ない。しかし、それら作品の有する文学史的特徴―「長篇物語」、「伝奇物語的性格」、「恋物語的性格」、「政治物語的性格」などが、全て『うつほ』にも具備されていることは、忘れてはならない。それらを全て具備した

「現存最古の」物語作品であることは、忘れてはならない。仲忠の生き方という物語内容の点からも、また、物語文学史上の特徴の点からも、『うつほ』は、もっと教材として取り上げられるべき作品だと思われるのである。

初出：「うつほ物語の教材価値」（『宇部工業高等専門学校研究報告』第59号 平成25年3月）

section #2

『落窪物語』の教材価値

はじめに

高校古文の検定教科書で、『落窪物語』を採録するものは極めて少ない。管見による限り、「古典講読」用の教科書として二社が掲載している（注1）だけで、「国語総合」や「古典」といった、多くの高校で中心的に使用されている教科書においては、その採録は皆無である（当時）。『落窪』が「物語文学史の中でも抜群に面白い」作品であり、「古典文学でこれほどの痛快さを味わわせてくれるテキストは、ほかに探すことはできない」（注2）にもかかわらず、である。

もつとも、その理由は、分らないでもない。例えば、私の現勤務校（当時）で使用している第一学習社『新国語便覧』を見てみると、『落窪』は、「継子いじめを扱った『住吉物語』や『落窪物語』」、「落窪の君は継母に虐待されるが、貴公子と結婚して幸福になる」といった程度の簡易な説明しかなされていないし、かような現状も関わってか、『落窪』＝「継子

いじめの物語」という主題把握のありかたは、周知の通り、広く固定されている。

学校現場において、「いじめ」が深刻な今日的課題であることに鑑みた時、それを話題にしたストーリーを教室で扱うことにとまどいを覚えるのは、指導者としては、至極当然であろうし、検定教科書が『落窪』を採録しない理由には、おそらく、それと同一線上にある配慮が働いてもいよう。いわば、検定教科書ならではの「教育的配慮」が多く関与していると推察されるのであり、その点においては、十分納得させられもする。但し、それは、あくまで『落窪』＝「継子いじめの物語」という把握に疑義を挟む余地がないならば、である。

本稿においては、まず『落窪』＝「継子いじめの物語」という把握について再検証を行い、その上で、『落窪』の教材価値とその具体的指導の方法や展望について言及を試みたい。

一

『落窪』が、「継子いじめ」をモチーフに組み込んだ物語であることは、疑いがない。継母北の方は、継子落窪姫君を、「寝殿の放出の、また一間なる落窪なる所の、二間なる」（巻